

1	SE	場面切り替え
2	SE	足音廊下（現代）
3	一ノ瀬	中庭に出た後、本校舎の向かいある建屋に入った。 「C棟（しーとう）」と呼ばれる特別校舎の中はとても見慣れた景色が広がっていた
4	一ノ瀬	ちよつと埃っぽい空気も、タイル敷きの床に擦れる乾いた靴音も、人けがないと不気味さを覚える長い廊下も
5	一ノ瀬	石造りの学生寮や食堂はどこか非日常的な光景だったけれど、ここは本当にいつも通りの、見飽きていたはずの学校の風景だ
6	一ノ瀬	ここは一体どこなのか——みちるに聞けばすぐに分かるのかもしれない。けれど、僕が本当に転入生ならそれくらいことは知っているだろうし
7	一ノ瀬	困ったな。どう切り出せばいいか分からない
8	一ノ瀬	ちゃんと話を聞けるまで軽はずみなことはしない方がいい——そうは思っても、そんなかしこぶったことをいつまで言っていられるのか
9	みちる	「あんまり面白くない？」
10	一ノ瀬	「——え？」
11	みちる	「ここに初めて来る人ってね、見たことないものばかりですごいって、驚く人がほとんどなんだけど、何かそういう感嘆が無いというか反応が薄いというか……」
12	みちる	「だからあまり興味ないのかなって」
13	みちる	「もしかして実は体調良くなかったり？ もしそうだったらごめんね、変に連れまわしちゃったかも。昨日着いたばかりだもんね」

14	一ノ瀬	「ううん、大丈夫。ちょっと考えごととしてて。こっちこそごめん、せつかく案内してもらっているのに、ぼーっとしちゃって」
15	みちる	「本当に？ 無理してない？」
16	一ノ瀬	「本当に。それに、面白くないわけじゃないよ。 ただ、知っている場所に似ているからあまり驚いていないのは本当かも。 学校ってどこも似たような感じなんだなーってくらい」
17	SE	足音廊下急ぎめ
18	一ノ瀬	そう答えると目を見開いたままみちるが迫ってきた
19	みちる	「そうっ、それだよ」
20	一ノ瀬	「え……？」
21	みちる	「どうしてここが学校だって分かるの？」
22	一ノ瀬	「どうしても何も、学校は学校でしょ？ 少し違うところもあるけど、校舎も廊下も教室も、学校を学校だって分からない人はいない、と思うんだけど」
23	みちる	「……。タク、ひょっとしてからかってる？」
24	一ノ瀬	「え？ どうして？ そんなつもりは全然ないよ」
25	みちる	「……」
26	一ノ瀬	胡乱げな瞳が遠慮なくどんどん近づいてくる
27	一ノ瀬	「ちょ、ちよつと？ー！」
28	一ノ瀬	か、顔が近いっ
29	みちる	「むー（ <i>みちる</i> さんくさいものを見ながら品定め、唸ってる感じ）」

30	一ノ瀬	琥珀色の大きな瞳がきらきらと揺れる
31	みちる	「まあ、嘘を言っているようには見えないし、本当にそう思っているってことか」
32	一ノ瀬	「……はあ」
33	一ノ瀬	「誤解が解けたのはいいけど、一体どうして？」
34	みちる	「ちよつと、ね。今言っちゃうこともできなくはないけれど、せつかくだからもう少しタク自身が自分の目で見た方がいいと思うかな」
35	一ノ瀬	「余計に分らないんですが……」
36	みちる	「ふふん。いいからいいから、ほら早くいこ」
37	SE	場面切り替え
38	BGM	【BGM】やっぱりチョコは手作りねーピアノ
41	一ノ瀬	「へえ、上手いんだ」
42	みちる	「えへへ。ありがと」
43	一ノ瀬	「出てる楽器も結構多いね」
44	一ノ瀬	「ドラムセットとかマリンバ、シロフオンは定番だけど、なんというか、太鼓？ みたいな、見たことのない打楽器が多い気がする」
45	みちる	「トリウイウム用にとってどこの団体も寄付してくるから、どんどん増えていくみたい。あっちの準備室にはもつと色々あるんだ。 珍しいのだと、この間はトーキングドラムが運ばれてきたかな。 トーキングドラムって、もともとは演奏法を示すみたいなんだけど、小さくてすごく可愛いのが」

46	一ノ瀬	「そう、なんだ。もしかしてみちるは音楽系の部活に入ってた？」
47	みちる	「ぶかつ？」
48	一ノ瀬	「ん？ うん。楽器も多いし、ピアノも上手だし。何かやってるのかなと思ってさ」
49	みちる	「ぶかつ——ぶかつ……部活？」
50	一ノ瀬	「なんだろう、みちるが考え込むように固まっている。そんなに変なこと言ったかな……」
51	一ノ瀬	「吹奏楽部とか、軽音楽部とか」
52	みちる	「ああ、部活ね！ そつか……部活——って、じゃなくて。ううん、部活はやってないかな。トリウィウムにはそういう活動はないから」
53	一ノ瀬	「そうなの？ それにしては上手だったね」
54	みちる	「休みの日とか、時間が出来た時に弥彦先生に無理言ってちよつと貸してもらってるの」
55	一ノ瀬	「さつきの曲もその練習の成果？」
56	みちる	「そうなるかな。出来ればもうちよつと色々弾けるようになりたいんだけど、今はこれが精いっぱい」
57	みちる	「貴重な物だから本当はあんまり触っちゃいけないんだけど」
58	SE	【効果音】ピアノ
59	みちる	「——こんなに素敵な音が聴けるんだもの、もつと楽しまないと損だよね」

60 一ノ瀬 「たしかに高そうなピアノだね。僕の学校にもピアノはあったけどもう少し小さかった気がする。弦も見たことないくらい長いし、グランドピアノっていうのかな」

61 みちる 「そう、グランドピアノ！ さっきの曲もそうなんだけど、この鍵盤に触れた人達が色々な想いを持って作ってたんだなあって考えると、なんだか胸が熱くなるっていうか、わくわくしてくるの」

62 みちる 「音楽だけじゃないんだけどね。言葉もそうだし、数式や文字だってそう。私達の知らないもの、想像もしていなかったような世界を次々生み出していった人達って本当にすごいと思うんだ」

63 みちる 「タクもそう思わない？」

64 一ノ瀬 「そこまで考えたこともなかった、っていうのが正直なところかも。というか、そういうこと考えながら勉強している人は初めて見たくらいだよ」

65 みちる 「うつ……やっぱりそうなんだ……」

66 みちる 「そう、だね。みんなに言うとは体似たような反応を返される、かな」

67 みちる 「はあ……。あーあ……タクは違うと思ったんだけどなあ」

68 一ノ瀬 「どうして違うと思ったのかは分からないけど、僕達くらいの年代ってそういうものじゃない？ 後から振り返れば役に立つのかもしれないけどでも、今は無理やり詰め込まれてる感があるのは仕方ないというか」

69 みちる 「勉強に対する考え方はどこも変わらないんだね……」

70 みちる 「あ、そうだ。タクはあの写真知ってる？」

71 一ノ瀬 「写真？」

72 一ノ瀬 みちるが指した先にはこれも音楽室の鉄板。埃をかぶった有名な中世音楽家達の肖像画が並んでいた

73	一ノ瀬	「なぜだか分からないけどどこにでもあるよね、あれ。左からバツハ、モーツアルト、ベートヴェン、ショパン、シューベルトかな」
74	みちる	「やっぱり分かるんだっ」
75	一ノ瀬	「やっぱり？」
76	みちる	「あ、ううん。こっちの話。でも、たぶん私の周りは誰も分からないと思うかな。みんな同じ（おんなじ）顔に見えて不気味だって言うくらい」
77	一ノ瀬	「うーん。まあ、不気味かどうかはともかく、テストで点を取る以外の目的で覚えようと思う人はあまり居ないかもしれない」
78	みちる	「……もしかしてタクつてば勉強得意？」
79	一ノ瀬	「え、どうだろう。普通？ だと思うけど」
80	みちる	「ね、ちよつと一緒に来てくれない？！ 見せたいものがあるんだっ」
81	一ノ瀬	「あ、ちよ、ちよつとみちる！？」
82	一ノ瀬	「なぜだろう。みちるがとてつもなく目を輝かせて腕を引っ張ってくる」
83	一ノ瀬	「わ、分かったから。そんなに引っ張らなくても——」
84	SE	足音教室へ急ぐ
85	SE	場面切り替え
86	SE	教室戸開ける
87	みちる	「他のクラスと比べるとちよつと狭いんだけど、遠慮せず入って入って」
88	一ノ瀬	「うん、ありがとう」

89	一ノ瀬	どうしたんだろう。あれからやけに上機嫌みたいだ
90	一ノ瀬	「ここは教室？」
91	一ノ瀬	C棟から降りて食堂が併設されていた本校舎へ戻る
92	一ノ瀬	音楽室の半分ほどの広さに、黒板と正対するように机や椅子が整然と並んでいる。校舎が石造りということもあって雰囲気は少し違うけれど、やっぱりどこにでもあるような学校の教室だ
93	みちる	「ここは私の、私達のクラスが使ってる教室なんだ。あの窓側の一番前が私の席だよ」
94	SE	足音教室（石床）
95	SE	物音机の中を漁る
96	みちる	「えーと、あったあった。はい、これ」
97	一ノ瀬	「教科書？」
98	SE	本/めくる
99	一ノ瀬	装丁（そうてい）もざっと見た限りの内容も、僕達が使っているのと同じだ……でも、それにしては
100	一ノ瀬	「やけに年季が入っているような……？」
101	みちる	「弥彦先生の授業で使うのなんだけどね、タクならなんとなく分かるかなーって」
102	一ノ瀬	「分かるも何も、これは僕も持っているよ。そっか、本当に同じ学年だったんだ」
103	みちる	「やっぱりそうなんだっ。ねね、中読める？」

104	一ノ瀬	「それは、読めると思うけど——というか英語やドイツ語みたいな語学ならともかく、世界史の教科書なんだし読める読めないも無いと思うんだけど？」
105	みちる	「それはそうかもしれないんだけど……いいから、早く早く」
106	一ノ瀬	みちるの何かを期待するような眼差しが、何故か一段と光を増した気がする。もしも尻尾があつたらブンブンと音を立てて揺れているに違いない
107	一ノ瀬	「う、うん。そうだな、この間進んだところは——」
108	一ノ瀬	みちるの得も言われぬ迫力に気圧されながらページをめくる。 ちよつと古びているけれど、上質紙のさらさらとしたツヤとインクの匂いに遠くなっていた記憶が少しずつ鮮明になっていく
109	一ノ瀬	「あつた——『皇帝フリードリッヒ二世とルネサンス』。 ユリウス・カエサルの後を継いだ初代ローマ皇帝アウグストゥスに憧れた孤児フリードリッヒ二世が、アウグストゥスの成し遂げた『パクス・ロマーナ』を再現しようと神聖ローマ帝国の皇帝に成り上がるまでと、その功績について。1200年代中期、中世真っ只中に在位した皇帝だけど、その進歩的な視点はルネサンスの先駆者とも呼ばれる」
110	一ノ瀬	「カエサルのガリア戦記を少し読んだことがあつて、その名前が出てきたっただけで妙に嬉しくなつて、いつもは退屈なはずの授業がこの時だけは楽しかったのを覚えてるよ」
111	一ノ瀬	「うん、ちょうどこんな感じだったかな。 みちる達はどこまで進んでるの？」
112	みちる	「……（息遣いのみ。呆氣に取られてはつと呆けている感じ）」
113	一ノ瀬	「みちる？」

114	みちる	「へ？ あ、えつと……だ、大体同じところかな。ほら、中世って色々な見方があるから全く一緒というわけではないけど——」
115	みちる	「(本当に読んで……術式も無しで……≡独り言っぽい感じ)」
116	一ノ瀬	「そうなんだ。たしかにルネサンスの先駆者を見るなら同じ時代にアッシジの聖人フランチェスコもいるし——みちる？」
117	一ノ瀬	どうしたんだろう。ここに来てからみちるの样子がおかしい。落ち着きがないというか、何かを焦っているような。かと思えば無言で考え込んだり
118	一ノ瀬	それにしても——みちるの样子はたしかに気になるけれど、今はこの教科書だ。これは間違いなく僕の記憶にあるものと同じものだ。それはつまり——
119	一ノ瀬	「ねえ、みちる。良ければ他の教科書も見せてもらってもいいかな？」
120	みちる	「ふえ？ あ、うん。それはいいけど——と言っても、今は他にこれくらいしか持っていないんだけどね」
121	SE	物音机の中を漁る
122	みちる	「はい、これ」
123	SE	物音物を渡す。
124	みちる	「今あるのはそれと——日本史と数学かな。問題集とかもあるけど、これはさすがに違うかも」
125	一ノ瀬	「ありがとう」
126	一ノ瀬	「へえ、やつぱり同じだ。でもそうだね問題集は違うみたいだ。というか、問題集なのに今年のじゃなく、結構古いやつなんだね」

127	みちる	「ああ、それは——教科書もそうなんだけど、みんな同じのをずっと使っているから、かな」
128	みちる	「たまに新しいのが見つかって共有されることはあるけど、珍しいものだとおじさん——弥彦先生達が学生だった頃から使ってたものもあるみたい」
129	一ノ瀬	「……新しいのが見つかる？」
130	みちる	「あ、そうだタク。良かったらまたちょっと移動しない？まだ見せたいところがあるんだ」
131	一ノ瀬	「それはいいけど——じゃあ、これしまっておかないと」
132	みちる	「ううん、それはいいの。タクが持っていて。はい、カバンも貸してあげる」
133	SE	物音がやいそ系
134	一ノ瀬	「みちるが使うんじゃないの？」
135	みちる	「もともと寮に戻しておこうと思っていたし、たぶんタクにも必要になるものだろうから」
136	一ノ瀬	「僕に？」
137	みちる	「うん。詳しくはあとで弥彦先生に聞くといいんじゃないかな」
138	みちる	「じゃあいこつか。ちょっと歩くけど、そんなに遠くはないから」
139	SE	場面切り替え
140	一ノ瀬	「これは——」

141	一ノ瀬	本校舎を更に昇り、北の端に位置する扉を開ける ちようど学生寮と本校舎が隣接する形になる一室には異質な光景が広がっていた
142	一ノ瀬	「ここが、見せたいところ？」
143	みちる	「うん。もしかしたらタクは初めて見るんじゃないかな」
144	SE	足音教室（石床）
146	一ノ瀬	窓からわずかに日が差し込む薄暗い部屋の中央に、腰の高さほどの窯が大きな口を開けていた
147	一ノ瀬	窯のそばの棚には青や紫、様々な色の液体や錠剤の入った瓶が並び、窓際のサンルームには、人の背丈ほどの奇妙な植物が鉢から飛び出し鬱蒼とした影を作っている
148	一ノ瀬	なんだろう、この部屋の中は妙に現実感が薄い気がする。晴れていた記憶はいつの間にか希薄になっていて、どこかで見たことがあるはずなのに、あれは一体どこだったのか思い出せない
149	みちる	「タクは錬金術って知ってる？」
150	一ノ瀬	「錬金術？ 錬金術って……あのゲームとかで出てくる？」
151	みちる	「うん、たぶんその錬金術で合ってるかな」
152	みちる	「と言っても、きっとタクが知ってるゲームみたいになんでも作れるようなものではなくて、薬品を合わせて授業で使うものを作るくらいなんだけど」
153	みちる	「錬金術が化学（かがく）、化学（ばけがく）の礎（そ）となったのは知ってる？ その思想はともかく、やっていることはタクも知っている化学のそれとあまり変わらないかも」

154	一ノ瀬	錬金術を学校で？ まさか本当に金（きん）の錬成を目指す訳ではないんだろうけど……
155	一ノ瀬	「授業で使うものって、もしかして本当に金が錬成できることもあるの？」
156	みちる	「どうかな。たぶんこのやり方で金を造り出すことは出来ないとは思うけど。あ、でも金よりも面白いものができることもあるみたいだよ」
157	一ノ瀬	「面白いもの？」
158	みちる	「鉄より硬い氷とか、火を閉じ込めた宝石とか」
159	一ノ瀬	「鉄より硬いつて……本当に？」
160	みちる	「学生でそこまで扱えるようになる人はまずいなくて、私も実際に見たことはないんだ。でもトリウィウムは歴史も長いから、そういう逸話というか『卒業生の伝説』みたいなのは結構あるみたい」
161	一ノ瀬	「……。みちるはどうして僕にそんな話を？」
162	みちる	「トリウィウムを知ってもらうなら欠かせないことだと思うから。でも、一番は——」
163	みちる	「なんとなく、かな」
164	一ノ瀬	「なんとなく……？」
165	みちる	「そう。なんとなく」
166	みちる	「でもタクを見ていてそのなんとなくが、やっぱりなっているのに変わったかな」
167	みちる	「本当はもっと色々見せたいけど、そろそろ先生のところへ行こっか。タクが今考えていること、知りたいと思ったこともきつとそこで全部分かると思うな」